参拜の栞

長良 天神神社
岐阜市長良天神町　電話 058(231)7703〈代〉
電話 058(231)1507

神　　門

祭神	菅原道真公
鎮座地	岐阜市長良一九七二番地の一
境内地	四千五百坪
氏子	百十五町内 約四千戸
例祭日	四月五日
主な神事	元旦祭（一月一日）　初天神（一月二十五日） 節分祭（立春前日）　勧学祭（三月二十五日） 例祭（四月五日）　茅輪祭（立秋前日） 七五三祭（十一月十五日）　誕生祭（毎朝） 奉賛会大祭（十一月二十三日） 月次祭（毎月一日、十五日） 御縁日祭（毎月二十五日）
主要建物	本殿　享和元年建立 拝殿　嘉永三年建立 祭文殿　昭和三十九年四月完成 社務所　昭和四十一年十月完成 神門　昭和四十三年七月完成 参集殿　昭和四十三年十月完成 拝殿翼廊　昭和四十七年十二月完成

参　集　殿

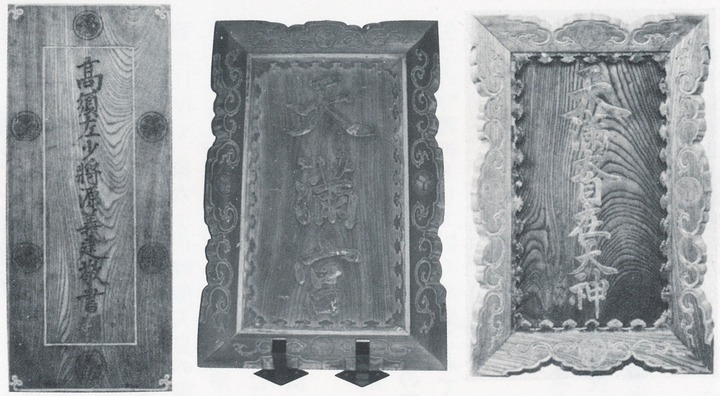
御由緒のあらまし

当社の創立は詳かではないが、後鳥羽院の承久年中に、斎藤帯刀左衛門尉親頼が、美濃国目代に任ぜられ、美濃斎藤家の祖となるや斎藤一族の本拠地である加賀敷地で氏神として祀られていた天満宮を美濃の地十五ヶ村に勧請したと伝えられ（濃陽諸土伝記）長良天神もその一社であります。

寛正年中に、斎藤妙椿、利藤兄弟が社殿の御造営を奉仕し、それから長良三郷（上福光、中福光、真福寺）の惣社と崇められ、加納天神、忠節天神、日野天神とともに四天神と称せられて、武将からも屢々崇敬寄進が捧げられましたが、天文四年七月の大洪水に社殿が流失し、社宝記録等悉く散失してしまいました。

慶長八年に三郷の氏子によって社殿の御造営が行はれ、享和元年同じく三郷氏子によって社殿が再建され、其の後数回御屋根葺替が奉仕されて今日に至って居ります。

昭和三十四年の伊勢湾台風によって、荘厳な神域が一夜にして荒頽するに及び、氏子中に熱烈な奉賛熱が興り、同三十六年に奉賛会が結成されて御造営事業十年、祭文殿、社務所、神門、参集殿等次々に完成、輪奐の美が整って、神威は御創立当初に弥増して顕現されることになりました。



高須少将奉献の神額

高須藩主松平義建公と神額

高須少将義建公は、第十代の高須藩主で、学徳のほまれ高く、常に菅神を崇められた。嘉永元年、心願をこめて、当社に「天満大自在天神」の神額を奉納し、つゞいて嘉永五年には、特に国家安康、家運隆昌を祈願して「天満宮」の神額を奉納されました。

義建公の二男慶勝（十四代）、五男義比（十五代）相ついで、宗家名古屋藩主を継ぎ、七男容保は会津藩主、八男定敬は桑名藩主を継ぎ、幕末維新史の中に、大きな役割を果したことも、この義建公心願のあらはれと云われています。

中山権大納言忠能卿と神額

中山忠能卿は、文筆書道に優れ、常に朝権恢復につとめ、菅公の精忠を欽慕し、篤く天満天神を崇められた。外国船渡来で国論動揺の嘉永五年、国事祈願のため「天満宮」の神額を、加納藩士大塚源治郎、塩谷澤治郎（忠能の弟子）に託して、当社に奉献された。これは加納にも天満宮があるが、中仙道沿いで武家の目に触れるのを避けるため、特に長良天神に立願したと伝えられています。

菅公の御神徳

天資学徳にすぐれ給い、五才の時庭の梅花を見て和歌を詠じ、十一才の時同じく梅の漢詩を作って神童の誉れ高く、十八才にて文章博士となられました。又、書道にも長じ給い、藤原行成、藤原佐理と共に三蹟と称えられ、宇多上皇の御信任厚く、第六十代醍醐天皇の御代右大臣に進まれたが、藤原時平のため強訴されて太宰府に流され、延喜三年二月二十五日薨じ給う。薨去と共に神異が起り、天満大自在天神として顕現され、太宰府天満宮、京都北野天満宮に鎮祭されました。

爾後、文学守護の御神徳は、全国に広まり、庶民生活の中に天神信仰となって、科学文化の開けた今日では、文化生活の守護神として広く尊崇されています。

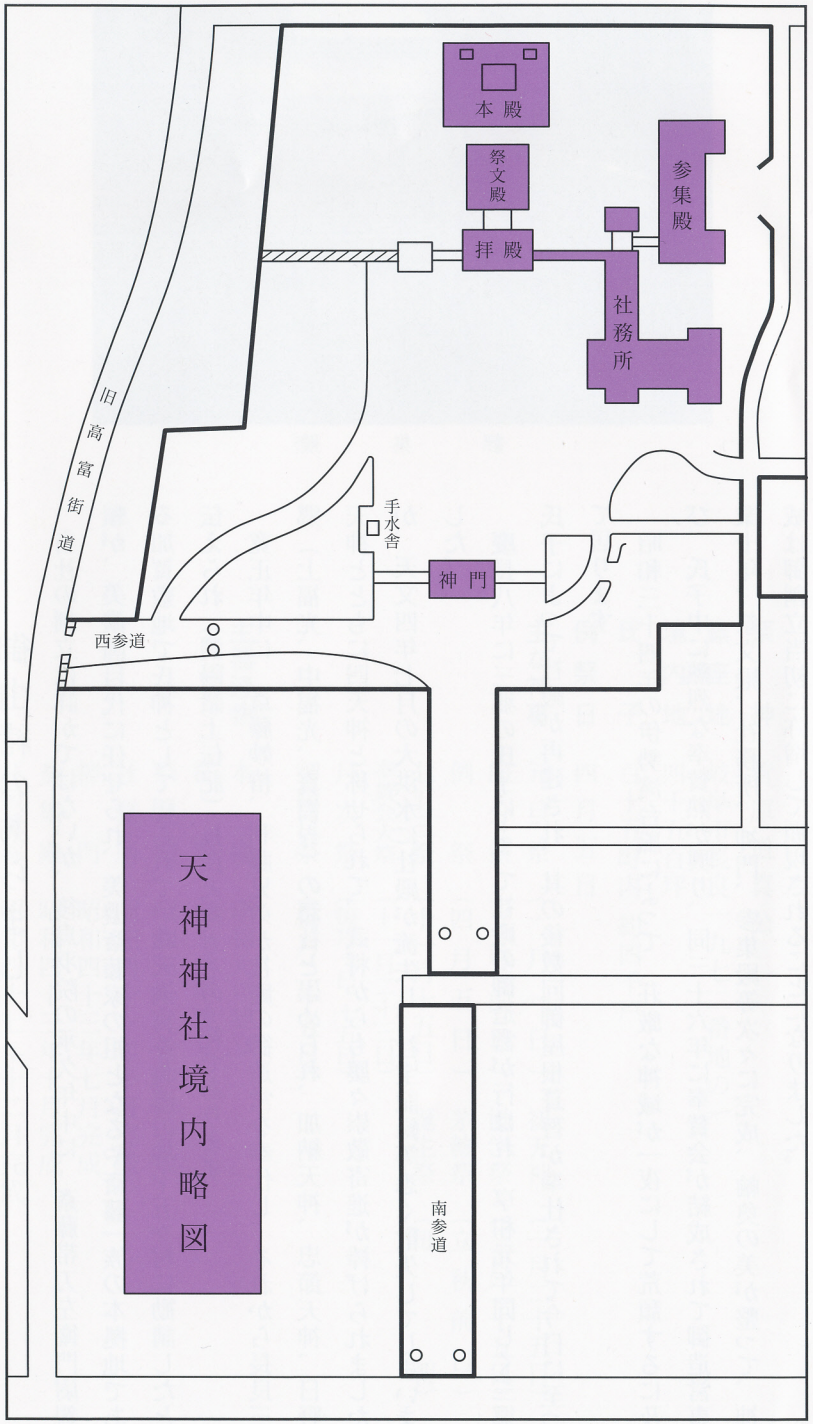
菅公と牛

菅公のお生まれが丑年の丑の日であって、菅公も牛に御関心が深く、御年十五才の元服の夜、白牛大木に打たれ死すの夢を見られ、それからその牛像を画かれて御拝されたと云うことです。

寛平五年北山に茸狩のとき、山中で白い小牛を得給い愛育されましたが、其の後配所太宰府に赴かれる途中、河内の「こもやの里」で藤原時平の討手が菅公を殺害せんとするとき、この牛が馳けて来て、角でこの賊を突き殺しお助けしたと云はれています。

又、太宰府で薨じられた時、御棺を牛に引かして葬場に向かう途中、牛が坐して動かなくなった。其処は丁度菅公が生前に御好みになった景地であったので、神意ならんと其の地に葬った。これが安楽寺であり、今の太宰府天満宮の地であると云うことです。こうした数々の言い伝えから菅公と牛とが信仰的に深く結びついています。

菅公と梅

菅公は菅原是善卿の御子として、第五十四代仁明天皇の御代承和十二年六月二十五日丑の日に生誕されたと伝へられますが、その御屋敷が紅梅殿と称せられ、母君懐妊の時、梅実懐中に入るの夢を見給い御生誕の時、口中に梅実を含んで居られ、この実を庭に植えたるに一本の白梅となる。

後世、菅公が太宰府に流され給うた時、筑紫に飛行したのが、この白梅だと云はれて居ります。古来、梅の異称を「好文木」と言はれて居り、文神である菅公と梅の結びつきも又神秘なものがあります。